

平成22年度ユニバーサルデザイン（UD）教育の取組

1 学校名	佐賀県立唐津南高等学校		
2 所在地	佐賀県唐津市神田字堤2629番地1		
3 校長名	福光 幸子		
4 学級数 児童生徒数	9 学級 358 名	5 実施学年 児童生徒数	1・2・3 年 358 名
6 取組のねらい	<p>UDについての理解を図り、生活の中で身近なUDについて考えさせる機会を与える。また、このことをきっかけとして生活そのものについて考え、専門科目農業・家庭を学ぶ生徒たちに「豊かさ」について考えさせる機会とする。</p>		
7 取組の実際（写真等を入れ具体的な様子がわかるようにすること）	<p>❖ 学校全体での取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 障害者に対する理解を深めるための講演会 日時：平成22年12月6日（月）5限目 演題：「みんなちがって みんないい」 講師：社会福祉法人天童会 永尾 忠博様 <p>生徒たちに対しては、主に知的障害者に対する理解と、どのように対応すべきかをDVDを見ながら具体的な事例をあげ、お話いただいた。</p> <p>❖ 各教科・科目における取り組み （A科＝生産技術科、F科＝食品流通科、L科＝生活教養科）</p> <ul style="list-style-type: none"> 全学科1年生：現代社会（公民科）領域「豊かな社会と社会福祉のあり方」において、ノーマライゼーション・バリアフリーなどに関連して取り扱った。教科書や資料集を使い、UD商品の例を紹介した。 全学科2年生：保健（保健体育科）領域「健康で安全な社会づくりーだれもが暮らしやすい社会づくり」において、用語の説明を行った。 全学科3年生：英語Ⅱ（英語科）教材「Universal Design」の中にUD7原則のうち3つが紹介されており、その内容を把握させ、具体的なものについて考えさせた。 A・F科1年生：家庭基礎（家庭科）領域「私たちのくらしと社会福祉ーだれもが住みやすい社会をつくるために」や関連する保育領域においてUDについて説明し、身近なUD商品の例を紹介した。 A科2年生：作物（農業科）イネの播種作業において、苗箱を播種機から苗床まで運ぶ際に楽な姿勢で移動できるよう機械の搬出側にコンテナを設置し、作業の効率性・安全性を求めた。 		



- A科2年生：野菜（農業科）、A科3年生：課題研究（農業科）イチゴの栽培において、高設栽培の様式を取り入れた。作業効率や作業姿勢などを意識しながら設計し、土台の製作に取り組みさせた。
- A科3年生：農業機械（農業科）アーク溶接・ガス溶接において、実技練習の際に楽な姿勢で安全に作業するため、座った状態で作業ができるような作業台・イス・フォルダー等の製作に取り組みさせた。
- A科3年生：生物活用（農業科）園芸療法の授業において、車いすやからだの不自由な方とも一緒に活動できる花壇を設計し、製作に取り組みさせた。
- F科1・2年生：食品製造（農業科）UDについて説明し、食品の形状やパッケージなど、食品の製造におけるUDの工夫を考えさせた。また、学科をあげて取り組んでいる虹ノ松原の環境保全にも触れ、多くの人々が自然に触れ合うことのできる場所づくりという観点から広い意味でのUDの解釈に心がけた。
- L科3年生：フードデザイン（家庭科）、L科3年生：発達と保育（家庭科）高齢者や乳幼児の食事についての領域で、どんな状況にある人でも食べやすい献立や調理法の工夫について学習させ、調理実習を行った。
- L科1年生：社会福祉基礎（福祉科）、2年生L科：基礎介護（福祉科）、3年生L科：家庭看護・福祉（家庭科）高齢者・障害者の疑似体験をすることで理解を深めることから始め、UDの7原則や実際の例について写真を見せながら説明した。その後、身の回りのUD商品を探して記録し、課題として提出させた。また、UDについての作文・アイデア作品に取り組み、84名の生徒が「佐賀県こどもUD作品コンクール」に応募した。



❖家庭科目「課題研究」における取り組み

専門学科には、「課題研究」という授業がある。これは、「専門の各分野に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、統合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てる（学習指導要領解説による）」という目標を達成するために、生徒たちが1年間をかけて実施計画を作成し、それに沿った調査研究等を実行し、評価を行っていくものである。生活教養科は家庭に関する学科であり、この中でヒューマンサービスに関心をもっている生徒が自発的にUDに関する研究を行った。

最初に障害者やUDについて調べ、特にUDではバリアフリーとの違いをしっかりと把握していた。また、地元唐津市の中心部に「唐津市まちなかUD事務所」が設置されていることを知り、訪問してUDの説明を受け、UD商品やアーケード内に施された滑り止めの工夫を見せてもらうことができた。多くの実物や商品

を見ることで、生徒たちは UD の具体的なイメージを持つことができていた。障害者・妊婦・高齢者・疑似体験ではその不便な場面にも気づき、その後の研究に大きく役立ったものとする。これらの調べ学習・体験学習を経て、11月の本校文化祭に展示するために点字入り校内案内図を作成した。実際に視覚障害の方の来校はなかったようであるが、複雑な校舎配置図がどうしたらわかりやすいものになるか、一生懸命に考えて工夫を行っていた。また、2つのアイデア作品を考え、「佐賀県こどもUD作品コンクール」に応募した。



なお、以上の研究は本校の「課題研究発表会」において本校全生徒・職員と近隣の中学生、保護者や一般の方の前でプレゼンテーションソフトを用いて発表を行った。まとめとして、「誰もが住みやすい街づくりのためには、一人ひとりの心がけと思いやりの気持ちが大切」と訴え、この発表を聞いた1・2年生からは、「自分たちが授業で学習したことに通じることがあり、興味をもって聞くことができた。」との感想を聞くことができた。また、スライドで実際のUD商品を見ることができたことから印象にも残ったようで、生徒のみならず多くの方への啓発活動の一環とすることができたとする。



8 取組の成果と課題

UD教育推進校における取り組みとしては、全職員に対する啓発研修が行われないままに各教科・科目におけるそれぞれの授業が中心となったため、全体的な統一感や連携がなく、まとめも不十分であった。しかし、それぞれの担当者による授業には新しい視点と工夫があり、繰り返しその授業を受けた生徒たちはUDについての理解を深め、日常生活の中に気づきをもって、便利な生活とその背景にある「豊かさ」について考える機会となったものとする。

しかし、今回の取り組みは各授業ともUDについて理解させることが中心となっており、まだ十分なものとは言えない。今年度の取り組みをきっかけとして、今後は具体的なUDについてアイデアを考えさせるとともに地域社会への発信を行い、生徒自身の活動に変えていかなければならない。しかし、今年度の取り組みは複数の専門学科をもつ高等学校としてUD教育を進めていくにあたって基礎となるものであり、今後も継続していかなければならないと考える。そのためにも、職員への十分な啓発研修を実施していかなければならない。また、トイレや多くの段差など校内の施設・設備におけるUDにも目を向け、まずは生徒・職員自身がよりよく暮らすことも大切な要因になると考える。

